

「日本における美容医学の現状」

吉村浩太郎

東京大学医学部形成外科

1. 日本における美容医学の歴史

日本における美容医学は美容、整容を目的とした開業医の活動に始まり、開業医を中心として 1966 年日本美容整形外科学会が(1978 年日本美容外科学会に改称)、日本形成外科学会会員を中心として 1977 年日本整容形成外科研究会(その後日本美容外科学会に改称)が、それぞれ設立された(現在は同名の2学会が併存している)。1978 年には美容外科は厚生省に標榜科目として認可されるに至った(美容皮膚科や美容内科は現在でも標榜科目ではない)。その後、1987 年に日本美容皮膚科研究会(その後日本美容皮膚科学会に改称)が設立され、現在では美容外科医、形成外科医に限らず、皮膚科医を含む多くの医師によって美容医療は行われている。

上記の如く、従来は美容外科という領域しかなかった美容医学は、90 年代以降の医療技術や医療機器・材料の飛躍的進歩によって、数多くの非手術的治療法が開発され大きな変貌を遂げてきた。米国の統計では、この10年で美容手術がほぼ横ばいの成長であるのに対し、非手術療法は300%を越える成長を遂げている。今後も非手術療法が成長する傾向が長期的に続くことが予想される。

2. 美容医学の目的とは

美容医療は疾患の治療ではなく、“生活改善”(通常生活には問題ないが、それ以上の優越的な機能や外観を求める)の一つである美容的欲求を満たすための医療であり、健康保険が適用されない自由診療の一つである。現代社会では外貌による精神的ストレスを従来以上に強く感じる人々が増えており、美容医療を受けることによって仕事にもプライベートにもより積極的になり、その人本来の魅力や能力を發揮できるようになることがあるのも事実である。

3. 美容医療の現況

美容医療は、治療手技から見れば外科的治療、皮膚科的治療、内科的治療、再生医療と分けることができる。

1)外科的美容医療

美容外科的治療には大きく分けて、自分を変える(変身)治療、と、自分を戻す(若返り)治療がある。前者は、患者自身の先天的な外貌の特徴を変えることを目的としている。すなわち、眼を二重にしたり、顔を小さくしたり、鼻を高くしたり、バストを大きくしたりする美容手術であり、従来は美容医療の中心的存在であった。後者は、患者自身の 10 年前、20 年前の外貌に近づける美容医療であり、アンチエイジング美容医療(見た目のアンチエイジング)とも呼ばれる。具体的には、以前はなかったしみ、しわ、たるみの治療、下垂した瞼や乳房を吊り上げる治療、禿げた頭髪を再現する自家植毛などである。美容手術後遺症の約 7 割は移植された異物(人工物)を原因とする後遺症であり、異物に頼らない治療を実現することは今後の美容医療においてきわめて重要な意義を持っている。

2)皮膚科的美容医療

美容皮膚科的治療のターゲットは、主にしみ、しわ、にきびである。近年人気が出ている、コラーゲン・ヒアルロン酸注射、レーザー・光治療やケミカルピーリング、トレチノイン療法、ボツリヌス菌毒素の美容目的使用など、侵襲が小さく回復期間が短い皮膚科的治療法の進歩より、患者数で見ると現在では外科的治療を圧倒的に上回っている。しかし、牛由来コラーゲン注入剤を除くと、治療に使われる外用剤、医療機器、注射剤のほとんどがわが国では未承認であり、大半が医師の個人輸入など医師の裁量に基づいて治療が行われているのが実状である。

3) 美容内科的治療

美容や長寿をめざした内科的なアンチエイジング治療としてホルモン補充療法、抗酸化療法、キレート療法なども米国を中心に抗加齢医学として盛んに試みられている。胎盤エキス(プラセンタエキス)の注射などもアンチエイジングの謳い文句で行われているが、いずれも臨床効果のエビデンスはまだ乏しいのが実状である。

一方、脱毛症やにきびなどの治療を目的としたホルモン療法(抗アンドロゲン療法)などがわが国でも近年行われている。女性の難治性にきびに対しては spironolactone が、禿髪(男性型脱毛症)については、finasteride(プロペシア®、5 α リダクターゼ阻害剤)が使われている。

内服や注射による男性ホルモンやアナボリックステロイドの投与は、運動療法と共に脂肪を減らし筋肉をつけて体形を変えることは可能である。また、性同一性障害に対しての反対性ホルモン投与は、性器や乳房に対する外観の変化を得ることが可能である。いずれもホルモンの投与には副作用のリスクを伴うために慎重な管理が求められる。

4) 美容治療としての再生医療の取り組み

また最近、ヒト組織の成分や細胞などを使った再生医療の研究が進み、美容医療の領域においても臨床研究が始まっている。美容を目的とした再生医療は競争する既存治療がすべて自由診療であり高価格であるため、価格競争力の面からは有利であるという特徴を持つ。現在の主なターゲットは、①皮膚(培養皮膚、培養線維芽細胞によるシワ治療)、②脂肪再生(豊胸など軟部組織増大)、③毛髪再生(培養毛乳頭細胞移植)、などである。

5. 今後の課題と展望

美容医療は、他の自由診療の領域と同様に、今後も患者ニーズが増加を続ける傾向が見られ、美容分野への医師の参入も近年急速に増えている。医療レベルも少しずつ改善され、新しい治療法の開発も積極的に進める体制ができてきている。今後は美容医療の教育システムが徐々に確立され、これまで以上に研究機関、企業がこの分野の研究を推進し、学問としても体系化されていくことであろう。美容医療のさらなる発展のためには、美容医療を提供する医師および周辺業界が、科学的エビデンスに基づく中立で公正な情報とともに安全で質の高い医療を患者に提供して、患者の自己選択・自己決定を徹底し、モラルの低下を防ぎ、社会からの信頼を獲得する努力を続けることが不可欠である。